

名前をたずねる子供

—BBC News インタビューにおける大人と子供の相互行為分析—

細馬宏通(早稲田大学文学学術院)

1. はじめに

2020年のCovid-19の世界的流行により、在宅勤務の機会が増え、家は、家庭の仕事と外での仕事とが混在する場所となることが多くなった。在宅ミーティングでしばしば問題となるのが、ミーティングの最中に子育てや介護、あるいは訪問者への対応など、家庭の仕事が入ってくることである。特に子供は、自分の意志で自由に動き回るために、ミーティングの思いがけない登場人物となる場合が多い。自分や他の参加者の子供の姿や声がミーティングの映像や音声に入ってくる経験は、いまや多くの人が持っていることだろう。

大人はミーティングに現れた子供を、どのような形でミーティング内で受容することが可能だろうか。この問題を考える上で興味深いのが、2020年7月1日に起こった、BBC Newsにおける経済専門家ウェンハム氏への約5分半のインタビュー「Child interrupt BBC News interview - BBC News」である。司会者とウェンハム氏はコロナ禍におけるイングランド政府の政策と地方での活動との差について質疑応答を交わしたが、その最中に、ウェンハム氏の子供が部屋に入ってきて、ウェンハム氏に話しかけ始めた。他の事例と異なるのは、子供やインタビュー어가単にニュースから離脱させられるのではなく、司会者とやりとりを行い、ニュースの中に組み込まれた点である。男女参画や子育ての記事をしばしば取り上げ、リベラルな報道で知られるGuardian紙はインタビューの当日、『ママ、この人の名前は?』専門家の娘、BBCのインタビューに侵入」と題してこのできごとを報じた。タイトルに用いられた「ママ、この人の名前は?」は、実際に子供の発した発話である。記事は、司会者と母親の対応を賞賛する一方で、あくまで子供を「侵入」した者として記述した。Guardian紙に限らず、他の新聞記事も司会者と母親の対応を賞賛する一方で、子供がインタビューを「邪魔した interrupt」「ぶち壊した crash」といった見出し語で同様の報道を行っている。

これらの報道は、まず大人が行っているニュース・インタビューが維持されるべきである前提のもとに、子供を闖入者として扱っている。しかし、このインタビューがウェンハム氏の家庭の場で行われていることに注意すると、子供の行動は必ずしも理不尽なものとは言えない。子供にとって本来の家庭は親とのコミュニケーションを自由に行う場であり、ニュース・インタビューの方こそ、その家庭に闖入してきた異質なできごとだからである。そう考えると、インタビュー中に子供のとったさまざまな発話や行為は、単にインタビューを破壊するものではなく、むしろ、家庭への闖入者に対する交渉と見ることができるのではないだろうか。

エソノメソドロジーの分野では、大人の規範に従ったり逸脱する存在という従来の子供観に、さまざまな形で異議を唱えてきた。たとえばMackay(1973)は、社会学で従来唱えられてきた「子供の社会化」という概念は、大人の持つルールやルールに則った行動の望ましさを、すなわち規範 norm を自明視したものであり、実際の相互行為では、むしろ大人は子供のとる行動に依存することでルールを達成していると主張した。近年では、相互行為分析をもとに、単に大人の想定する規範を子供が習得するという大人-子供関係を見出すのではなく、大人と子供の相互行為において子供の主体的な関わりが埋め込まれていることを明らかにする研究が行われつつある(森, 2009; 高木, 2011; 粕谷, 2018; 伊藤, 2020)。

本発表では、インタビュー中に起こった二人の大人と子供の発話、および視線変化や身体動作を記述した上で、子供の行動がインタビューの規範に対してどのようなタイミングでどのような内容で行われているのかを検討する。とりわけ、報道で強調された「ママ、この人の名前は?」という、司会者の名前を母親にたずねる発話に焦点を当て、この発話をインタビューの文脈から逸脱した単独のものとしてではなく、一連の発話連鎖の中で捉え直す。その上で、子供が実は単にインタビューを侵害していたのではなく、大人の生み出す「名前をたずねる発話連鎖」と関連する形でこの発話を行っていた可能性を考える。

2. 方法

2.1 データ

本論で用いる事例は、2020年7月1日にBBC News内で行われた司会者 Christian Fraser によるインタビュー Clare Wenham 博士へのインタビューで、司会者とインタビューはコロナウイルス禍への対策において政府・地方自治体の二つの関係がいかにあるべきかについて質疑応答を行っている（以下「事例1」と表記する）。本論では、YouTubeのBBCのオフィシャル・チャンネル上に公開されている事例1の一部の記録をデータとして用いた（データ1）。この動画には、実際の放映に用いられた司会者、インタビュー、インタビューの子供によるやりとり（1分37秒）が収められている。データ1とは別に、インタビューの全体像を把握するため、開始から終了までのすべてのやりとりを収めた放映時の録画データ（5分37秒）も用いた（データ2）。

2.2 データの概要

表1 事例「ママ、この人の名前は？」におけるインタビューのフェーズ遷移と各フェーズの時間長

番号	主な発話ターンとできごと	時間長 (秒)	発話番号
1	F (導入)	30.8	1-3
2	F (質問)	40.8	4-7
3	W (応答)、A	17	8-23
4	F (トラブルへの言及)、W、A	11.6	24-40
5	W (応答)、Aの身体動作	16.6	41-42
6	F (質問)、Aの身体動作	22.9	43-50
7	W (応答)、Aの身体動作	26.6	51-60
8	F (質問)、Aの身体動作	23	61-64
9	W (応答)、Aの割り込み	32.3	65-71
10	F、W、Aによるやりとり	40.8	72-118
11	F (質問)	15.2	119-128
12	W (応答)、Aの本棚での作業	47.3	129-151
13	F (クロージング)	10.2	152-155
総時間長 (秒)		335.2	

* 1-13はフェーズ番号。F: 司会者, W: インタビューー, A: 子供。

インタビューに子供@Aをまじえたやりとりが本格的に起こったのはフェーズ10のみである。以下では、このフェーズ10における三人の相互行為を詳細に分析する。

3. 結果と考察

3.1 司会者から子供への名前を用いた呼びかけ

フェーズ10はWが合計32秒以上に及ぶ長い応答(65-70)を終えたあとに、Aを交えた会話が起る場面である(表2-4)。Fは突然、「What's your daughter called? (娘さんのお名前は?)」とWに対しインタビューの内容とは異なる質問を行う(72)。Wが「She's called ***. (***(Aの名前)といいます)」(74)と答えると、Fは発話の冒頭で子供の名前を呼んで「***, I think it looks better on your lower shelf (***(Aの名前), 下の棚の方がいい感じだと思うよ)」(75)と話しかける。Lerner(2003)によれば、名前を呼んでから隣接ペアの第一部分を形成する呼びかけは、発話の冒頭で受け手が誰であることを明示し、受け手の応答可能性に問題があるときにその可能性を確保するために用いられやすい。これまでFが直接Aと話すこと

以下では、事例1に登場する三者を司会者:F、インタビューー:W、インタビューの子供:Aと記述する。F、W、Aの活動の全体像を把握するために、データ2に含まれる発話と身体動作の分布をもとに、全体を13のフェーズに分けた(表1)。通常、BBCニュースの専門家へのオンライン・インタビューでは、司会者の短い導入のあと、司会者の質問とインタビューの応答の隣接ペアがいくつか続き、最後に司会者が短いクロージングを行う。事例1でも、最初は型通り、Fの導入(フェーズ1)と最初の質問(フェーズ2)から始まるが、Wによる最初の応答(フェーズ3)以降、質問応答連鎖に子供@Aの発話や動作がまぎれこむ(フェーズ3~9)。司会者が@Aの名前を問うたのをきっかけに@Aを含む短い会話が行われ(フェーズ10)、その後、Aは母親の背後の本棚のそばで作業をするものの、直接の参加はほとんどない(フェーズ11, 12)。クロージングの冒頭で、子供が再び「お母さん Mummy」と呼びかけるが、司会者は「*** (子供の名前) が呼んでいるようですから、もう行ってあげてください。あなたはとてもお忙しいし、手一杯だということはよくわかります」と声を掛け、「おつきあいいただきありがとうございます、上出来でした、ありがとうございます」とインタビューを締めくくった(フェーズ13)。

全体の中で、インタビュー形式から逸脱し、司会者とインタビ

表2 発話(71-85)(フェーズ10前半)のトランスクリプト

71	(0.3)
72	F: What's your daughter called?
73	(0.6)
74	W: She's called ***** (子供の名前)
75	F: *****, I think it looks better on your lower shelf
76	(0.3)
77	W: hhhhhh
78	(0.4)
79	W: .h
80	(0.3)
81	F: he....hehehe
82	(0.4)
83	F: and it's a lovely unicorn .h [it's a love]ly unicorn
84	W: [ha ha]
85	F: .h OK, it's so, uh, uh, obviously

ができなかったことを考えると、この発話は、Fが積極的にAに応答を促し、Aを会話の参与者としてインタビューの中に包摂する試みだったと言えるだろう。もう一つ重要な点は、発話〈75〉が、Aの名前を尋ねる発話〈72〉とWによる応答〈73〉によって用意され、Aの名前+隣接ペア第一部分として達成されていることである。この問題については後で再び考察する。

Fの発話がAに対してどのように受容されているかを考えるために、Aの反応も記述しておこう。まず、FがAの名前をたずねる発話〈72〉を発し終えた時点では、Aは本棚に絵を置く作業を続けており、母親のWが「She's called ***. (***) (Aの名前)といいます」〈74〉とAの名前を発話した直後、ようやく絵を置く作業を中断してカメラの方を向く。Fの直接の呼びかけ〈75〉にもかかわらず、Aはカメラを見るだけで、発話による反応は行わない。ただしAがFの発話〈75〉の意味を理解しているであろうことは、発話に含まれる「棚」のほうを振り向いていることからわかる。

このあと、Fは「and it's a lovely unicorn .h it's a lovely unicorn (で、かわいいユニコーンですね。かわいいユニコーン)」〈83〉と言い添え、AとWはこの発話が開始された瞬間に再びカメラの方に向き直る。Fは息を継いで「OK, it's so, uh, uh, obviously (はい、それで、明らかに)」〈85〉と続ける。「obviously」という子供には難しい言い回しを使っていることから、ここでFは再びWに宛先を変えて、もとのFとWによる質問-応答の隣接ペア型の会話へと戻ろうとしていることがわかる。

3.2 子供から司会者へ名前を用いた呼びかけ

Wとの会話に戻ろうとしたFの発話は、突然Aの次の発話によって遮られる。「mom, what's his name? (おかあさん、この人の名前は?)」〈86〉。この発話は、冒頭に挙げたGuardian紙が記事のタイトルとして用いられ、あたかも子供がインタビューとは関係のない発話によって「invade (侵入)」したかのように扱われていたものである。

しかし、ここまでの文脈を考えると、発話〈86〉には記事で扱われたとは別の側面がある。それは「mom, what's his name?」という発話は、画面の向こうにいる相手の名前をたずねている点、そしてそれを直接相手に問うのではなく、Wに間接的に問うている点で、すぐ前のFによる発話〈72〉「What's your daughter called?」と同じ形式だということである。Aはただ唐突に相手の名前を尋ねたのではなく、先行するFの発話と同じ形式を用いてコミュニケーションを開始しようとしているのである。

二人の大人はAの問いにすぐには答えない。〈88〉でWは「sh... (しーっ)」とAの発話を制する発声を行い、FもAではなくWに向けて「and do stop me if you need to crack on (早く終わらせた方がよければ遠慮なく止めて下さい)」と言う。それでもAはFとWの発話にオーバーラップしてFの名前を問う発話〈90, 94, 98〉を繰り返す。興味深いことに、

AはFの名前をたずねているにもかかわらず、Fによる発話とターン・テイキングを行っておらず、〈97〉でようやくFが自身の名前を「Well, my name is Christian (ええと、わたしの名前はクリスチャンです)」と明かしている最中も、問いをオーバーラップさせ続けている。

Aがようやく問いを止めるのは、Aの発話の宛先であるWが、「His name is Christian (この人の名前はクリスチャン)」といった直後である。ここでAの視線に見逃せない変化が起こっている。直前までWに視線を向けていたAは、Wが名前を告げた直後にモニターの方に顔を向け、「Christian」〈101〉と言うのである(図5)。相手の名前を呼ぶときに相手に視線を向ける行為は宛先を「明示的 explicit」(Lerner 2003)にする方法の一つである。Aはここまで、モニターに映っている司会者を見ながら発話したことはなかったが、発話〈101〉で初めて、司会者のChristianに明示的にアドレスした発話を行ったのである。Fは、この呼びかけに答えるように「Yes」〈103〉と発話する。

Fが短く答えたのに対して、Aは、〈101〉に続けて〈104〉で「I am just deciding where it can go, uh where, mummy wants it then?」と下を向きながら話す。Aの発話〈101, 104〉は、この時点で、Aによる〈86, 101, 104〉の一連の発話は、Fによる〈72, 75〉の発話とそっくり同じ形式をとっていることが明らかになった。

表3 発話〈86-103〉(フェーズ10中盤)のトランスクリプト

86	A: mom, what's his name?
87	F: uumm
88	W: sh.....
89	F: and [do stop me if you need to crack on]
90	A: [mom, (), you know name?]
91	F: do [do tell] us]
92	A: [()]
93	W: [no no I'm get]
94	A: [Mummy what] is [his name?]
95	W: [I'm get um] [shhhhh]
96	(0.3)
97	F: [Well, my name is [Christian]
98	A: [I () [Mummy what's] his [name?]
99	W: [His name] is Christian
100	(0.6)
101	A: Christian .h
102	(0.3)
103	F: Yes

すなわち、まず相手の名前をWにたずね、次にその名前を用いて名前+隣接ペア第一部分を形成する、という形式である。つまり、Aは、新聞記事の見出しで報道されたように単にFとWの会話を切断するためにFの名前をたずねたのではなく、Fと同じ形式でFとやりとりを行うべく名前をたずね、Fに質問することを達成したのである。言い換えれば、Aは、Fの行った発話〈72, 73〉とそれに続く〈74〉の形式を利用することによって、その場にいる参加者の名前を尋ねる隣接ペアを、名前を知らない参加者に名前+隣接ペア第一部分の形式で呼びかけるための連鎖として捉え直した。しかもこの発話〈104〉で、Aは、これまでの口調とは異なり、現在形や「deciding」、関係代名詞を用いた大人びた表現を試みている。Aの発話は、形式の点でも、丁寧さの点でも、受け手に十分な配慮を行ったものと言えるだろう。

FがA名前の呼びかけに対して短い応答〈103〉によって、呼びかけをより明示化 exposed (Lerner, 2003) したことも重要である。Fの応答による明示化は、それまでの話者AとFの参加地位が変化し、Fが話者Aにとってよりはっきりと受け手になったことを示している(森本, 2008)。Aが〈101〉に続けて〈104〉を発話することができたのは、Fが呼びかけに答えたことも影響しているだろう。これは、FがAの応答を得ることなく埋め込まれた embedded 形で名前+隣接ペア第一部分を発し、結局Aの第二部分を得ることがなかったのと対照的である。

4. おわりに

相手と同じ形式で発話を組み立てることは、挨拶に代表されるように、わたしたちが会話の形式を組織化していくときの基本的なやり方の一つである。Aは、WとFの会話から、名前を尋ね、その名前を用いて呼びかけるという発話連鎖の構造を読み取り、直後にそれを援用してみた。このインタビュー会話においては、大人が子供に配慮しているだけでなく、子供もまた大人の用いる発話連鎖形式に沿って、家庭への闖入者となんとか交渉しようと試み、フェーズ10以降、インタビューは無事完結した。コロナ禍における在宅会議という前代未聞の事態において、大人も子供もお互いを闖入者であることから相互行為の相手としてやりとりを行うべく試行錯誤を行っている。このような事態において、伊藤(2020)が指摘するように子供と大人はじつは相補的な存在であり、「子どもは大人の試みにつきあってくれている」とも言えるのである。

5. 参考文献

- 伊藤崇 (2020). 大人につきあう子どもたち—子育てへの文化歴史的アプローチ 共立出版
- 粕谷 圭佑 (2018). 児童的振る舞いの観察可能性:—「お説教」の協働産出をめぐる相互行為分析— 教育社会学研究, 102, 239-258.
- Mackay, R. W. (1973). Conceptions of children and models of socialization. In Dreitzel, H.P. (Ed.), Recent Sociology 5, London: Macmillan, 27-43.
- 森一平 (2009). 日常の実践としての「学校的社会化」 教育社会学研究, 85, 71-91.
- 森本 郁代 (2008). 会話の中で相手の名前を呼ぶこと—名前による呼びかけからみた「文」単位の検討— 串田秀也・定延利之・伝康晴 (編)「単位」としての文と発話 ひつじ書房, 221-255.
- 高木 智世 (2011). 幼児と養育者の相互行為における間主観性の整序作業: 修復連鎖にみる発話・身体・道具の重層的組織 社会言語科学, 14, 110-125.

表4 発話〈101-118〉(フェーズ10後半)のトランスクリプト

101	A: Christian .h
102	(0.3)
103	F: Yes
104	A: I am just deciding where it can go
105	(0.4)
106	A: uh where
107	(0.4)
108	A: mummy wants it then?
109	F: All right. [Where does mama wants it today?]
110	A: [mummy, where do you want this] picture...
111	W: I think just on that shelf is great, [thanks
112	F: [h
113	W: I'[m so] sorry
114	A: [Is that?]
115	(0.4)
116	F: ha ha
117	(0.7)
118	F: This is the most informative interview I've done all day. A::nd, so, just very quickly I'm just going to put one last one to you.